

「福島のアスリート」の空洞化

—アスリートの「福島/震災」語りから—

山城 才子

はじめに

あの大震災から二年。あらゆる立場の人々がこの抗う事のできない災害から立ち上がり、復興にむけて現在歩みを進めている真っ只中だ。その中でも福島県は震災で大きな打撃を受けた場所の一つだ。今尚その傷跡が深いというのは、察するに余りある。しかし福島県に生きる人々は復興に向けて希望を捨てる事なく、自ら様々な方面へ復興のアプローチを試みているのも事実であり、その逞しさには「東北魂」なるものを感じずにはいられない。

その福島県が復興への道を辿るにあたり、「スポーツによる復興」を謳う声もちろん存在するだろう。ここで興味深い資料を紹介したい。財団法人福島県体育協会が「生涯スポーツに関する情報の収集や整理を行い、情報を発信する」という目的の下、年に二回刊行する広報誌『Sports Fukushima』（以下『SF』）である¹⁾。福島県勢の国体の結果や県内で活躍するアスリートや監督らのコメント、あるいは福島県内におけるスポーツ振興活動の報告が主な内容だ。同誌の巻頭言には、同協会役員が「福島県」をあげての競技力の底上げ、スポーツ活動の活性化を呼び掛ける文面が並べられ、また県代表として活躍したアスリートたちの試合を終えた感想文が記事の中心となっている。

この資料を得た当初、筆者は同誌に掲載されるアスリートたちの声は、時に震災後、地元「福島県」への語りが顕著に現われてくると考えていた。だが、そうしたアスリートたちの発言を追っていくうちに何かしらの違和感を筆者は覚える事となった。というのも、彼らの語りを並べてみると、



『Sports Fukushima』25
(2011.3) 震災前に出来上がっていたものであり、震災については表紙に被災者へのお見舞いが印字されているのみである。

これは震災前後関わりなくなのだが、地元「福島県」に対する語りが、彼らの語りの中心には据えられていないと感じたからだ。何故筆者はこのように感じたのか。実際の彼らの言説から、その考察を始めてみたい。

震災後のアスリートの「福島/震災」語り

実質的に震災後初めての発行となったのは『SF』26号(2011.12)である。そこでは巻頭言(p1)で「今こそ立ち上がる時」とされ、スポーツマンが「ひたむきな姿を見せてくれること」が県民の「折れそうな心を少しでも支えることになり、一日一日復興に向けた足取りが力強くなっていくのではないかと語られる。

その号に掲載されたアスリートたちもまた、「ベストタイムを出し、少しでも福島の方々に元気をつけたい(p3)」、震災で「乗馬どころではなくなってしまう」が「いろいろな人が支えてくれたからこそ出場でき」「特別な大会になった(以上 p5)」「私にとって福島は大切な故郷です。後輩たちにはこれからも福島に誇りを持ってコートに立ってもらいたい、そして『福島は負けない』の精神を継承して行ってほしい(p6)」などと震災、福島について語ることとなる。

だが、少し不思議に思われるのは、福岡大学に在学中(おそらく福島出身でそちらに進学しているのだろう)のあるアスリートの発言に「福島/震災」についての語りがないことだ。そのアスリートは「勝つために自分の課題を克服することを一番に考え」た結果「勝ち進むことが出来た」と語り、指導してくれた先生や「様々な方々(以上 p4)」からの支援を感謝するのみである。そこに「福島」は登場しない。遠い福岡にいるため、と考えることもできるかもしれない。が、福島に縁のあるアスリートがこの時期福島について触れていないことに、何か違和感を抱かないだろうか

いや、実はこの『SF』が興味深いのは、こうした震災、原発事故や福島に触れていない記事が思った以上に多いからなのだ。『SF』26号では9人のアスリートのうち福島や震災に触れているのは半数以下の4人なのである。

もう少し資料を当たってみよう。『SF』27号(2012.3)は「震災の影響も沢山ありましたが、多くの方々のご厚意により充実した練習をさせていただきました(p3)」「なにより東日本大震災で被災した福島県民のために、元気やパワーを与えたいという想いがあり、絶対に入賞したいと強く思って臨みました(p4)」などと福島/震災について語る記事があり、この号は5人中4人の選手が震災に言及している。だが、最新号である28号

(2012. 12) では、それは急激に減り、福島や震災について語っているのは7人中2人のみとなるのである。

このように、福島県体育協会の広報誌に思った以上に「福島/震災」語りが少ないということ、これをどのように考えればよいのだろうか。

「自分語り」に回収される「福島/震災」語り

そもそもここでのスポーツの語りには一定の構造がある。これはこの広報誌に限られるものではないだろうが、同誌に登場するアスリートの発言は、全国大会までの鍛錬の過程、心の葛藤、得られたもの、そして今後の展望などを振り返るような「自分の物語」が中心となっているのである。

僕が自転車競技を始めたのは高校1年生の時・・・先生から声を掛けられたことから始まりました。自転車競技というスポーツは想像以上に過酷なスポーツで、始めた当初は練習が辛過ぎて毎日毎日泣きながら走っていました。しかしそんな辛い練習の成果もあり、高校ではインターハイ優勝、海外の試合にも日本代表として出場するまでになりました。高校卒業後も・・・優秀な指導者の下インカレで優勝、Wカップにも出場させていただきました。(22号, 2009. 12, p5)

ここで言う「自分の物語」とは、まとめると①困難を克服して強くなる自分と、②その際の他者からの助けへの言及、の二つから成り立っていると見えよう。では、そうした語り口は震災前と後とどのように変化しているのか。震災後の『SF』の国体選手の語りを見てみよう。

3月11日の東日本大震災に遭遇し、更には福島第一原発の事故により・・・全国各地からこの富岡の地に集結していた仲間たちは・・・みんなバラバラになってしまいました。・・・いつになったらまた仲間たちと一緒に練習を再開できるかわからない中、先生の・・・言葉を信じて、それぞれの活動場所で練習に全力で励みました。そして震災から約2か月後、先生の言葉どおりまた仲間たちとともに活動が再開されました。・・・その後もたくさんの人に支えられながら活動を続け、今回の山口国体を迎えました。・・・今、優勝という形で大会を終えることができ、お世話になった方々に少しは恩返しのできたのかなとほっとしています。(26号, 2011. 12, p6)

これは先に「福島は負けられない」という部分を引用した選手の語りである。この選手は福島について、震災と原発事故について語っている。がしかし、

先にあげた①②は全く変わりが無い。つまりこの選手の語りは、先生の助けや励ましによって困難を克服して勝利をつかむという物語、という事になる。

そして、さらに重要な点は、この選手の物語においては震災や原発事故すらも彼の成長過程における「克服すべき困難」の位置を与えられているということだ。実はアスリートたちによって語られる福島や震災についての語りは、こうしたスポーツによる「自己の物語」の中にすっぽりと収まってしまふ、そのような構造を持っているのである。

彼/彼女らは福島の代表であったりするわけであるから「福島のアスリート」として自らのアイデンティティを確立することもできただろう。しかし彼女たちの中には、成長する自分の物語がまずあり、「福島/震災」は彼/彼女たちが立脚する場所になっていない。『SF』にアスリートたちの「福島/震災」の語りが思ったよりも少ないことの一つの原因は、こうした語りがすぐにスポーツの「自己の物語」に吸収されてしまい、「福島/震災」の物語になりにくいから、と考えることもできるだろう。

だがこうした構造だけが、彼らの「福島/震災」語りが少ない理由ではない。次節では、彼らの「自己の語り」が、一体どのような場所に立っているのかを考察してみる。

国民体育大会と都道府県の空洞化

では、彼らの「自己の物語」が立つ場所とはどこなのだろうか。実は『SF』に掲載されるのは、そのほとんどが「国民体育大会」、いわゆる「国体」の福島代表となった選手である。

ところで、「国体」とはいかなるものであるのか。国体とは都道府県対抗、各都道府県持ち回り方式で毎年開催される、国のスポーツ振興法に定める重要行事と位置付けられ、わが国最大の国民スポーツの祭典²⁾と謳われている。しかし、権学俊は国体についての詳細な研究³⁾において、「オリンピック至上主義・勝利至上主義が形成されていく中、国体も重要な役割を果たしてゆく。(p247)」とし、最近の国体は「オリンピック大会の下請け以外の何ものでもない(p248)」と述べる。

確かに、『SF』に見られるアスリートたちの語りは、もちろん彼らがエリートであることもあるのだろうが、勝利すること、いかにして勝利したのか、に照準が合わされており、彼らの物語は常にナショナルなもの、「日本」に向かっているのだ。彼らにとっては「都道府県」とは、立つ場所でも、目指す場所でもなくなってしまうのである。これはある県の勝

利のために選手がその県に住所を移す、いわゆる「ジプシー問題」からも明らかであろう。選手にとって「国体」とは国内の一つの大会に過ぎず、どの県から出るのかについては重要ではないのである。

また、権は、国体は「県民総動員体制(p220)」をつくり出す、という。これは一見、スポーツが地域に根差すものであるかのようにも受け取れるが、その実際は、行政による無理やりの動員であり、その背景には行政側の「国体を利用した地域開発(p215)」の思惑があり、それは「国体を開催すれば県には運営費として少額ではあるが、国庫補助が出るだけでなく、文部省は学校体育の施設拡充費、建設省は道路建設費と、各省がこぞってどこよりも優先して補助金を交付してきた。(p214)」と言われるように、中央に経済的に依存する地方、という構図の中に納まっているのである。

また甲斐も「震災とスポーツの奇縁」⁴⁾という文章の中で福島のサッカー施設「ヴィレッジ」が原発設置の代償として設置されたのではないかという見解を紹介し(pp. 87-89)、それが「中央の文化の象徴(p89)」であること、さらに「原子力発電所建設にともないムラをおとずれた外国人や首都圏からの東京電力社員たちが村外からの新しい風としてムラに文化をもたらした(p89)」構造と同じであることを指摘している。

このように、地方のスポーツは経済的にも、そして文化的にも、中央、ナショナルなものに依存し、地域としてのスポーツが自立することが困難になっているのである。

アスリートもまた同じ位置にいないのか。彼/彼女らは福島代表ではなく日本代表となることを期待され又みずからもそれを目指している。すでに紹介した『SF』22号の自転車競技の選手の語りも日本代表の語りであり、このように彼らは日本代表となって各地域に凱旋する⁵⁾が、つまり彼/彼女らもまた「中央の文化の象徴」なのである。彼/彼女たちが「福島のアスリート」たり得ていないのはこうした理由にもよるのだ。

おわりに

スポーツの物語の強靱さ。自己の物語に回収される「福島/震災」語り。さらに、その自己の物語は中間の共同体をこえてナショナルなものへと接続する。そして、そうしたナショナルな場所から配分される資本や文化によって成り立つ地方のスポーツ。そうした構造において空洞化されゆく福島。これは実は原発が福島やその他地方都市に建設されていった構造と全く同形であることは指摘するまでもないことであろう。

『SF』においてアスリートたちが必ずしも「福島/震災」語りをしないと

いうことすなわち「福島のアスリート」の空洞化—はこうした構造によって創られているのである。「スポーツ」が「福島」や「震災」に何ができるのか。この問いを考えるためには、まずはこうした「福島」という単位に「スポーツ」が根ざすことが事実上困難になっている、という場所から考え始める必要があるだろう。

注

- 1) <http://www.sports-fukushima.or.jp/>。以下の『SF』からの引用はこのホームページ内の pdf ファイルから。引用ページなどは本文中に記載。
- 2) <http://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid/181/Default.aspx>。公益財団法人 日本体育協会ホームページ。
- 3) 権学俊『国民体育大会の研究—ナショナルリズムとスポーツ・イベント』2006 青木書店。以下引用ページは本文中。
- 4) 甲斐健人「震災とスポーツの奇縁」三野博司編著『大学の現場で震災を考える—文学部の試み』2012 かもがわ出版。以下引用ページは本文中。
- 5) 例えば『SF』20号(2008.12) p7には「北京オリンピック・北京パラリンピック特集」のページが設置され、福島出身者や福島を本拠とする日本代表選手の成績一覧があげられ、そのうち一人の選手の感想が掲載されている。その感想ではすでに述べた①②の「自己語り」がなされ「福島」については県民から励まされることへの感謝が述べられている。

あるストーリーが生まれるまで。それは一見気にも留めない様な小さなヒントから始まる。その広げていく過程は楽しくもあり、また広げていったのちにストーリーとして形にしていく過程は、時に息がつまる程の焦燥感を味わう事ある……なんて偉そうに書いてみましたが、何か一つのストーリーを形にしていくまでの作業は楽しい瞬間や苦しい瞬間が交互にやってくるものだな、その面白さと難しさをいつも感じます。でも私は今回正直ストーリーを生むスタートラインにさえなかなか立てずにいる状態が続きました。先生には感謝の気持ちを伝えるにはこのコラムで足りない程、最後の最後までお世話になりました(笑)。

だからこそ、なのですが、何事にも自分なりに「もがきにもがいて楽しもう」という私の密かな目標が出来上がった次第です。もしかしたら生き方にも繋がるものが、あるでしょうか…いや言い過ぎました(笑)。

山城才子